10月13日　　ヨハネによる福音書11章45～54節
「アイのメッセージ」

本日の礼拝は、逝去者記念礼拝です。私たちは、先に天に召された牧師先生方、兄弟姉妹が、その人生の始めから終わりまで神様に守られながら、信仰を守りながらその人生のすべてを生き切ったことをよく知っています。そしていつか私たちもその列に加わり、いつか復活することになることを、毎年この日の礼拝を通じて思い起こすことになります。

今日の個所は、少し前の「ラザロの復活」を前提とした個所です。ラザロの死と復活を目の当たりにして、多くの人々がイエス様の力を認めて信じましたが、イエス様がラザロを生き返らせたことは、ファリサイ派の人々にとって都合の悪いことだったようです。イエス様を殺そうと息巻く人が大勢いました。

ただそのようなユダヤ人の中でも、今日の個所では「大祭司カイアファ」という人物が、イエス様が死ぬことで、国民全体が、それどころか国も民族もすべての壁を乗り越えて、すべての人に救いが与えられるという、ユダヤ人にしては珍しい言葉を語っています。

これは預言であったと書かれていますから、彼自身の力ではなく、神様が言葉を与えてくれたということになります。しかし、ユダヤ人という敵対する存在でありながらも彼はイエス様の死を、そして十字架による全国民の救いを「認める」ことができたのです。

私たちは、この「認める」ということを、どれだけ行ってくることができたでしょうか。隣人が一人の大切な存在であることを認め、意志と尊厳を持ち、自分と同じように神様から愛されている一人であることを、私たちはどのような時も認めることができているでしょうか。

神様は私たち人間の思いを超えて、全ての人が悔い改め神様のことを、イエス様のことを信じることができるようにと愛を注いでくれています。ここに、私たち人間の理解も思いも越えて、すべての計画を定める神様の姿を垣間見ることが出来ます。このように、全ての人を用いて、すべての人に愛を注ぐ神様であるからこそ、「私たちも愛されている」「私もここにいてもいい」ということを、力強く信じることが出来るのです。

「アイのメッセージ」、「私」という視点によって行う証しによって、私たちは多くのことを語り伝えることができます。誰かに対して、「あなたたがここにいると私が嬉しい」と伝え、何か悪い行いを見れば「それはいいことではないと私は思う」と伝え、そして「私が神様にどれだけ救われたのか、どれだけ支えられているのか」を伝える、そのすべての信仰の言葉によって、私たちは神様の愛を伝えることができるのです。

そしてその言葉を、私たちはこれまで信仰の先達の口から多く聞いてきたと思います。先達たちは、どのような言葉を語っていたのでしょうか。江刺教会に繋がっていた一人一人の信仰は、どのようなものだったのでしょうか。おそらくは、誰一人として「全く同じ信仰」を持っていた人はいないのだと思います。それぞれの用いられたかがあり、それぞれの、一人一人の「私」の思いがあり、信仰の形があったと思います。そのすべてを受けて、今私たちは共に信仰を守ることが出来ているのです。その一人一人から教えてもらった、神様の愛の深さと豊かさに思いを馳せながら、これからの歩みをともに進めていきましょう。

今日の説教箇所：ヨハネによる福音書 11 章 45～54 節

- 45:マリアのところに来て、イエスのなさったことを見たユダヤ人の多くは、イエスを信じた。しかし、中には、ファリサイ派の人々のもとへ行き、イエスのなさったことを告げる者もいた。そこで、祭司長たちとファリサイ派の人々は最高法院を召集して言った。「この男は多くのしるしを行っているが、どうすればよいか。このままにしておけば、皆が彼を信じるようになる。そして、ローマ人が来て、我々の土地も国民も奪ってしまうだろう。」彼らの中の一人で、その年の大祭司であったカイアファが言った。「あなたがたは何も分かっていない。一人の人が民の代わりに死に、国民全体が滅びないで済むほうが、あなたがたに好都合だとは考えないのか。」これは、カイアファが自分から言ったのではない。その年の大祭司であったので預言をして、イエスが国民のために死ぬ、と言ったのである。国民のためばかりでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死ぬ、と言ったのである。この日から、彼らはイエスを殺そうとたくらんだ。それで、イエスはもはや公然とユダヤ人たちの間を歩くことはなく、そこを去り、荒れ野に近い地方のエフライムという町に行き、弟子たちとそこに滞在された。